（一）第782号 【昭和27年9月25日 第三種郵便物認可】 THE MIIKE （毎月1日、16日発行）昭和40年8月1日（日）

港沖竪坑移行 圧制と賃下げを許すな！

発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町2
電話 3033番 8100
編集兼発行人 山下 開

あらゆる階級斗争は政治斗争である
マルクス、エンゲルス（共産党宣言）

主張

見破ろう かくされた牙

ころもの下のヨロイ

間もなく終戦記念日がくる。

この二〇年間をふり返ってみただけでも、われわれ労仂者は「資本のあまりの独善」に怒りを新たにし「資本の冷酷な謀略」に対し、万感の胸に去来するを禁じえない。

われわれは、労仂者の斗争の基本があくまで「抵抗の構え」であることをこの二〇年をふり返っていよいよ痛感すると同時に、その以前の問題として**かくされた牙・ころもの下のヨロイ**を見抜くためには、「冷静さ」と「科学性」と「話し合い」の重要なことをあらためて確認したい。

つまり「資本に対して労仂者は常に警戒心をもたなければならない」ということである。

それでは、具体的にいってどんな問題が目の前にあるのか。

出炭・人員計画の提示

四山鉱港沖新竪坑への坑口（竪坑）移行をめぐる交渉で、三池労組は「新部内五二〇メートルでの出炭・人員計画の提示」を要求している。

これに対し会社側は「新竪坑には益すぎに移るが、新部内稼仂は一二月ごろの予定だから、いまは提示できない」と拒否している。

現在採炭中の六〇〇メートルから全員が五二〇メートルに移ることは、めったにないきわめて重大な転換であり、こんなときに計画を労仂組合に提示しない資本家などどこにもないし、また三井鉱山に計画がないはずはないのである。

その証拠に会社側には、現在の坑内外人員比**七対三を九対一**に、坑内直接夫対間接夫比**六対四を七対三**に変えて大増産をしようという合理化計画があり、いうまでもなくその実施がねらわれているのである。

炭鉱労仂者なら、とくにこのような合理化計画の実施がどんなに重大な労仂諸条件の変化（というより悪化）を来たすかをだれも知っている。

したがって、労仂者側の不安や不満を怒れて、なし崩しにうまく実施しようというのが会社側の作戦となり、現段階では提示しない方針に立っているわけである。

第二組合幹部は、合理化には反対しないという例の「生産性向上委員会」で**談笑のうちに**出炭・人員計画を会社側と話し合っているのだろうが、そんな話し合いだけで資本の一方的なやりくちを阻止し組合員の労仂諸条件を守ることは絶対にできない。

現場で転制支配や労仂強化で苦しんでいる第二組合員諸君のいよいよ根強い要求にこたえることにはならないのだ。

われわれは**かくされた牙**につき第二組合員諸君と話し合おう

標準作業量の引き上げ

会社側は七月三〇日の交渉で「新部内の標準作業量（ノルマ）は一〇月ごろ別途提案して引き上げる」と明言したが、ついで三池労組側の質問にこたえて「そのときには宮浦・三川の標準作業量引き上げも考慮している」ということばをにごした。

標準作業量引き上げは、まちがいなく賃下げとなる。

さすがに第二組合幹部も「標準作業量は現行通り」という要求を形だけはもっともらしく提示しているが「交渉はいまでなく一〇月ごろでいい」というごまかしを現段階ではやるだろう。

賃上げ一方（かた）七〇円という低額先行妥結を会社側とぐるになって強行した第二組合幹部が、その上、標準作業量の引き上げにも協力するなど、絶対に許すことはできない。

われわれは「当面の標作は現行通り」などという会社側や第二組合幹部の**ころもの下のヨロイ**を、労仂者としての永い経験と話し合いによってばくろし、あくまで抵抗しなければならない。

三池労仂者の「夏季斗争の意義」は、このような具体的課題と科学的判断に立脚する正しい反合理化斗争の一かんとして重視される。

われわれは確信をもって第二組合員や試用員に仂らきかけ、鋭どい抵抗斗争を組み上げることを、八月一日第二回中央委員会であらためて意志統一したところである。

期末斗争総括 たたかう組織づくりを！

中央委員会の意見から

われわれの批判

炭労の期末手当の斗いも、三池をはじめ三鉱連・北炭・太平洋各支部の「二九日より無期限スト突入」という実力の背景に支えられて、昨年末と同額、同条件の三万九千円で妥結することになった。

期末斗争の一般経過は一応省略して、八・一の三池中央委員会で出された「斗いのすすめ方」「組織づくり」についての論点をしぼってみることも、当面の炭労の斗い、組織づくり、大衆斗争推進の参考になると思うので、二、三その意見を紹介してみたい。

第一に、四五回大会の自己批判が今回の期末斗争にどう活用されたかであるが、たとえば要求額を必ず「斗いとる」という積極的な指導部段階の決意が、下部にどう反映されていただろうか。その点からいえば二八日の団交で三万九千円が提示されたとき、これを一蹴して、ストをバックにせめて四万円台にでものせる努力ができなかったものか、下部のものとしては理解に苦しむところである。正直にいえばストを指令された下部大衆の決意だけが空転した形であった。

第二は、三社先行、妥結という新戦術配置である。四五回大会の自己批判は「八社の統一を守り、そのためには機械的画一戦術をさけながら統一斗争を組む」ということであったと思う。ところが今回の期末戦術は従来の八社ブロックの結束を解き二段階、三段階に分けた斗いを組むことになった。このことは今後八社労組の格差を是認するばかりでなく、組織間の結束を弱めて、ひいては炭労全体の弱体化につながることが心配されてならない。

第三は、斗いの経過からであるが、スト日の設定がスト突入直前ごろまでなされなかったことは、指導部の頭の中の判断がどうであっても、下部大衆には本気で実力行使を構えて斗う決意があるのだろうかという疑念をもたせたことも事実であった。

さて、八・一の三池中央委員会の以上の指摘は、今後の炭労の斗争に非常に重要なものであるからあらためて、九月の炭労定期大会でも三池支部の意見としてのべることにしたい。

たたかいの評価

ふつう夏季斗争といえば、大体において「期末手当斗争」のことであるが、われわれの今度の場合は周知のように期末手当・港沖竪坑移行・遺族と被災者要求および保安斗争という一連の一段階斗争を盆休前の総力結集で組み上げ、秋季・年末斗争に引きつぐという構想である。

そこでまず「期末手当斗争」についての評価のあらましは——

第一に、昨年末とちがって第二組合幹部が同額要求の五万円にふみ切らざるを得なかった事実を評価したい。もちろん春斗における第二組合幹部の「七〇円の低額先行妥結」を、三池労組として徹底的に批判した成果だからである。

第二に、このことは第二組合中央委員会（七月二〇日）で「春斗での先行妥結については大衆不満が強い。期末手当では先行妥結をするな」という意見が、数名から出されたことで立証される。

第三に、したがってわれわれは「粘り強い説得」や「ストを含む抵抗斗争」の意義と効果とを、いま一度討議し確認することが緊急だ、とおもう。

港沖竪坑をめぐる ストライキ突入！

交渉経過にみる重要性

くわしくは七月三一日付伝単で報道したとおりであるが、港沖竪坑移行をめぐる諸問題は、本号の「主張」でも集約したように、今後の労仂諸条件に重大な影響をもち、第二組合員諸君を含む全三池の共通問題ばかりである。

立ち上がり、そして突っ込もう

会社側はふたたび第二組合幹部と共謀して、たたかいの本質をぼかした「先行妥結」を強行するにちがいない。

しかし彼らがどんなに巧妙にごま化しても、たとえば会社がねらう標準作業量引き上げひとつを取ってみても、まもなく必ず第二組合員諸君の不満をもおこさせ「正しい反合理化斗争」の意義が体で受けとめられる。

そこでわれわれは、団交をとおして総決起を実行し、強行後もさらにそのまま「突っ込む」ことを決意する。

この総決起には**ストライキ**を含み、そのあとも諸行動を強化しつつ突っ込むなかで、第二組合員諸君への仂きかけを、三池労組全員の「確信」の上に立って粘り強く展開し、次のたたかいに引きつぐ。

つまり、第二次行動方針に基づく第二段階のたたかいである、ということを再確認しよう。

一九名の仲間への 友愛・激励カンパ

製作所支部一九名の仲間たちにたいし、八月一日の第二回中央委員会は「人当り五〇円カンパ」を決定したが、その趣旨はあらまし次のとおりである。

製作所労組の越盆資金

今次春斗で月額一、一五〇円という最低額で妥結し、会社側から逆提案された再建合理化にも調印した製作所労組は、期末手当もついに「越盆資金」という形で本人分一三、五〇〇円・第一扶養者三、〇〇〇円・第二扶養以下一人につき二、〇〇〇円（組合員一人当り平均約二万円）という低額を押しつけられてしまった。

三池労組としての斗争

春斗直後は、期末手当の要求もしないのではかろうか？と案じられていたため、一九名の仲間たちとともに三池労組指導部は種々検討をかさね四四、〇〇〇円（前期並み）の要求を提示したが、製作所労組としても、前期妥結額三七、〇〇〇円に物価スライドを含めた四二、〇〇〇円の要求を提示するに至った。

この間、大地評（大牟田地方労仂組合評議会）および社青同（日本社会主義青年同盟）大牟田支部による伝単配布などの共斗推進が行なわれ、いわゆる地域共斗としての活動も展開された。

友愛・激励カンパの意義

一、三〇〇名の製作所労組のなかで一九名の仲間たちが活動することが、どんなに労苦多きものであろうかは、三池労仂者ならだれでもわかっていることである。

さらに、一九名の仲間たちのたたかいの意義がどんなものであるかも、全く自明なことである。

一方、越盆資金をめぐる製作所労組の委員会では、「経理状況悪化」に対しては「おどんたちこそまったく破産しそうだ」とハネ返すなど六時間以上も激論をつづけ執行部に「金をつくれ」という要求が出され、結局は個人別に積み立てられている斗争資金を一万円乃至五千円だけ引き出すこととなった。

しかし一九名の仲間たちには、むろん斗争資金の積立てがあるわけではないので、三池労組内部からの組合員の意見としてカンパが提起されたのである。

このカンパは、同志的な友愛カンパであり、激励カンパである。

このカンパ決定後、製作所支部を代表した川口委員は、心からの感謝と決意を述べ、感激的な満場の拍手が期せずしておこり暫らくは鳴りやまなかった。

このことは、われわれにとっても歴史的な一ページである。